

片マヒ自立研究会との出会い

豊住 正治

研究会の皆様へ

私を、研究会に引っ張り込んだのは、吉野栄一氏です。彼とは、横浜リハビリテーションへの入所が同じ日で、それ以来、何の縁か付き合いが続いています。

彼の退所が私よりも早かった（2005年6月）のですが、それ以降も月一回の割合で会っていました。ある日の会話を以下に綴ります。

吉：「俺、最近、片マヒ自立研究会という会に入ったんだ。」

豊：「あ、そう」

吉：「あんたも入ってみたい？」

豊：「何言ってるの！ <片マヒ>っていうことは、身体障害者の集まりだろ？俺がやられているのは、頭、あーたま。知ってるはずだろうに……。それに、体だろうが頭だろうが、愚痴や悩みを言い合うところ

には、関心がないんだ。これからどうやって生きてゆくか、それだけだね！大体、今まで散々おしゃべりしてきて、俺の気持ちわかってくれなかったの？寂しいね。ブツブツ……」

吉：「わかっているよ。わかっているから誘っているんだ。会のメンバーには障害について原稿を書き、本を出版した人も何人かいるんだよ。前向きだろ？インテリが多いんだ。」

豊：「俺、インテリってあんまり好きじゃないね！」

吉：「わかった、わかった。どうでもいいから一回付き合いよ。それでいやなら入らなくていいから。」

豊：「仕方がない。これも渡世の義理だ。一回は付き合いよ。」

吉：「……？」



小林 隆

予測もしていなかった病に突然襲われヤミの世界に投げ込まれ、不安におののきさ迷っている人に希望と救いの光を照らし、励まし続ける片マヒ自立研究会が、100回目の節目に到達しました。おめでとうございます。

私が、初めて研究会に参加したのは、何回目の研究会だったか覚えていませんが、その時、受けた感動は、鮮明に思い出します。今まで、全く見ず知らずの人が、ただ、

同じ病気になり、その病気を背負いながら生きているということだけで、年齢も性別も何もかも超えて一つの場所に集まって、皆さんの話に耳を傾けて共感したり、感動したり、喜び合う不思議な暖かい空間をこの研究会に見つけました。

あの時、支えの言葉をかけてくれた人はもういない。駅まで一緒に歩いて話をした人ももういない。あの人たちもきっと100回目の研究会にいたはずなのに。

ここまで来た幾つもの小さな節目が重い。何時の日にか、150回という記念する回数もやって来る。病に襲われ一人暗闇に涙している人達が、私が知ったと同じように、この研究会を知り、温かい友を得た喜びを150回の節目に、共に迎えるその準備の回が、今回の100回目の記念すべき回なのです。

回数を重ねるに従って、生きる光を照らす場としてありづけることが、役割としてあります。

さあ、森山さんをみんなで担ぎ上げて次の節目に向かって歩みましょう。

100回記念おめでとうございます

篠原 順子

立ち上げるのは出来ても、継続するのは大変です。長い歴史を刻んでこられたのですね。これもひとえに森山会長の人柄、求心力の賜物だと思います。

私と片マヒ自立研究会との出会いは、メンバーの方が中心になって、経験と情報をまとめた出版物『脳卒中後の生活』。

この本は、2005年11月に、先の見えない身体状況の中で、大田仁史先生にご紹介いただき、「森山さんと連絡を取ってみたら」、とのサジェッションも頂きました。

2005年12月の例会に初めて参加して、励まされました。

個性味あふれるメンバーの方々と、中心でしっかり舵取りをしている森山会長、いつも笑顔を絶やさずに、みんなのお母さん役を引き受けてくださっている森山夫人。森山さんからは的確なアドバイスを幾度となくいただき、ずいぶん勇気づけられました。

今後も、突然の想像もしなかった運命に悩み、とまどっている私たち患者の灯台の光になってください。



老いて学べば^{いのち}寿長し

河野 元一

戻る